

## 編集委員会便り

今号の特集は砂漠緑化システム。置き傘を戻すのを忘れ、降りだした梅雨を無念に思い、雨のあがるのを待ちつつ、この原稿を書いている。この雨の恵みを一時的にでも、無念に思う身勝手さが恥ずかしい。

今特集は会員の提案の中から、前編集実行委員長の本 宗明先生が採り上げられた。沢井委員（シャープ（株））が主となり、農業に関連しているとのことで、並河も企画に参画し、野田委員（株）クボタ）のご協力を得て、企画案が作られた。企画案について編集実行委員会では、緑化のための特別のエネルギー源はないのか、或いは、鳥取砂丘が減少しつつあるというが、これから緑化のヒントが得られるのではないのか、等々の貴重なご意見もあったが、頁数や人選の関係もあり、このような特集になった。

構成に付いては、まず砂漠の自然環境について、ついで、砂漠の増加は社会的要因のほうが大きいとも云われており、これを取り上げた。緑化については、土、水の利用、植物がかかわるため、これらを企画した。植物については、樹木や永年の草本類を生育させようとする場合と、集約的にその地域の食糧や換金作物を栽培する方法がある。ケーススタディでは、地域的な立場と植生の立場から対象を選んだ。加えて、都市の形成も重要であると判断した。

原稿をお願いした方が多忙の方ばかりにも関わらず、時間を割いてご執筆頂き、そのご協力に唯唯感謝している次第である。また、この1月、鳥取に行く機会があり、鳥取大学乾燥地研究センターの矢野友久センター長と竹内芳親教授に、企画案についてご相談したところ、貴重なご意見を賜り、執筆候補者をいろいろと紹介していただいた。ここに厚く御礼申し上げる。

10余年前、上海から北京を経由して長春に行った際、不毛の山々を見、また先年サンフランシスコからテキサス州に飛んだ際、遥か下に小さな人工的の緑地を見たことが印象に残っている。米国では土壌保全の立場もあって、畑の耕起に従前から行われてきたブラウ（洋風の犁）の使用が減り、新しい耕法に移ってきている（conservation farming）。まず砂漠の緑化が問題になるのが、耕地や林地等の活用されている土地の保全

も炭酸ガス問題や総合的な環境保全から、或いは食糧資源生物資源の立場からも重要である。

先般はブラジルで環境に関する国際会議も開催され、その後、緑化に対する、政府の計画が新聞に報じられているが、林前委員長にニュースの収集と見直しについて、敬意を評する次第である。特集号作成の段取りは、先ずテーマが決められるのが、遅くとも9カ月前、企画原案が検討され決定されるのが、7カ月前、企画の変更や執筆者の不都合が生ずることなどで、正式な依頼が遅れることもあるが、原稿締切が2カ月前と、可成りの時間を要している。しかし、特集は会誌が発行された段階で、up-to-dateな問題であることが大切である。昨年の湾岸戦争は学会誌の編集の立場からもその成り行きについて、関心を持ったが、若松副委員長も編集委員会だよりで述べられた通り、林先生が早期終結と見通され、特集の材料にはなり得なかった。編集委員会が隔月に開かれる以上時間的短縮には無理があろう。

林先生が編集実行委員長になられたときに、小生も編集実行委員会の末席を汚すことになった。以前の編集実行委員会雰囲気は知らないが、この5年間委員長について特に印象に残るものの一つが、駄洒落と忘年会におけるカラオケの歌の確かさと面白い作詞であった、と書くとき多くの委員から非難を浴びるかもしれない。実際は、多くの提案をなされ、意見を引き出され、尊重され、自己の見解と見通しも持たれ、編集の「おさ」の在り方を出席の度、教えられた。編集委員の一人としても厚く御礼申し上げる次第である。この4月から編集委員に僅かの変動があり、東京工大の越後亮三先生が担当されておられる。林先生に勝とも劣らない、優れた委員長とお見受けしている。

末筆になったが、本誌の編集について、ご提案、ご意見をどしどしお寄せいただくよう、お願いしたい。（追記）本特集での著者によって、用語として「砂漠」と「沙漠」が使われている。これは専攻されておられる分野の学術用語と思われるので、尊重することとした。

並 河 清（京都大学農学部）